

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	星のさと全体の共通理念「一人一人に一人一人の介護を」をスタッフ全員で共有している。スタッフミーティングやカンファレンスなどで話し合いながら、日々のケアでの実践に向けて取り組んでいる。	理念については朝夕の申し送り時に一人ひとりに添った支援が提供できているか確認したり、話し合いが行われている。理念を事務所に掲げ、来訪者にも分かり易くしている。職員はサービス提供時、迷うことがあれば同僚や先輩に相談し、その利用者に適したより良いケアを見つけ提供している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩に出かけ、地域の方と挨拶を交わしている。地域のボランティア「ひめりんごの会」の皆さんが訪ねてきて下さり、交流を楽しんでいる。又、地域行事の文化祭やお神楽に参加したり、星のさと行事の星のさと祭りなどでも交流している。	住宅地から離れた場所にある事業所であるが外出時に出会う住民や果樹園農家の方々と挨拶を交わしている。様々なボランティアがグループや個人で入れ替わり訪れ利用者と交流している。7月には複合施設合同の「星のさと祭り」に大勢(100名余)の住民や家族等が訪れ交流を深めることが出来た。地域文化祭には毎年作品の出品依頼がきている。一般会社や県短大から認知症に関する講師の依頼を受けるなど地域から必要とされる事業所となっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	管理者は依頼を受け、認知症の理解と実践の取り組みや介護のことなどの講師を行っている。又、相談があれば随時対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用状況や評価結果の報告・活動状況・入居者の皆さんと交流などを行っている。そこでの意見等を参考に、日々のサービス向上につながるようスタッフで話し合っている。	家族、区長、民生児童委員(7名)、あんしん相談員、地域包括支援センター職員、医師等をメンバーに2ヶ月毎、定期的に開催している。開催日を全家族に連絡している。普段は数名の参加であるが敬老会など行事と兼ねて開催した時は10名前後と大勢の方の出席が得られている。参加者間での意見や情報交換など双方向的な話し合いが行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	長野市の集団指導に出席している。市から派遣されるあんしん相談員の受け入れを行っている。	区分や更新申請の代行で担当窓口を訪れている。調査員がホームに来訪した時は本人の状態や暮らしの様子を伝えている。一般会社(保険会社)や県短大から認知症等に関する講師の依頼があり出かけている。市の担当者や包括支援センター職員等とは逐次連絡を取りあっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	スタッフミーティングや日々のケアの実践の中で、身体拘束について学んでいる。身体拘束をしないケアを前提としてケース検討を行い、対応を工夫している。	年1回、拘束に関する勉強会を実施している。全職員が拘束に関する内容や弊害を理解しており、施錠を含め身体拘束をしないケアの実践に努め、利用者が何時も安心し、自由に生き生きと過ごせる支援に徹している。職員の言葉にも「どんな状況であっても私達は拘束に頼ることはない」と強い意志を伺えた。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	スタッフミーティングで虐待について学んでいる。スタッフ間で、虐待が見過ごされることがないように互いに意識してケアしている。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	スタッフミーティングで学んでいる。資料もホームにあり、いつでも閲覧できるようになっている。 実際に成年後見制度を利用している入居者がいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、書面と口頭で説明をしている。必ず不明な点等を尋ねて、理解・納得を頂けるよう対応している。今回の改定の際は、説明会を開催して理解を頂けるよう対応した。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者や家族とは、日頃からコミュニケーションを図りながら、意見や要望を言いやすい関係・雰囲気づくりを心がけている。特に居室担当は年間通して意見等を表しやすい関係を築く努力をしている。 又、毎月、あんしん相談員と話をしながら意見や要望を表せる機会を設けている。	利用者の多くは自分の意思を伝えることが出来るが数名の方は難しいので情報等を基に本人の立場に立って本人本位に検討している。生活状況連絡票には生活全般、食事、排泄、移動、入浴、医療、行事、購入立替品の各報告と本人のスナップ写真を数枚載せた報告書を毎月、個別に作成し家族に送っている。同時に家族等からの意見要望を伺う欄にも工夫し書き込んでいる。家族等からは「暮らしの様子が良く分かる。安心できる。」と好評である。家族が大勢集まる行事の際には個別に意見・要望などを聞き信頼関係を築くよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフミーティング或いはその都度意見を聴き、反映させている。	老健との合同会議は3ヶ月毎に行われ、内部研修と外部研修報告、感染症や緊急時対応、運営に関するなどが主な内容である。スタッフミーティングは毎月第2火曜日の夕方から2時間かけて業務の見直し、研修報告、その他の議題に付いて話し合っている。職員からの意見等に関しては一人ひとりから聞くようにしている。会議以外でも管理者はフロアにいることが多いので気軽に声を掛け合い職員と話をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の勤務状況を把握し、その人の能力、やりがい感を見極め、連携して働けるよう環境整備に努めている。又、有給休暇も希望を取り入れている。スタッフの募集もしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	スタッフミーティング・隣接の老健との合同研修会・法人外の研修に参加し、その報告等をスタッフ全員が聞き、レベルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	長野県宅老所・グループホーム連絡会の会員になっている。又、善光寺平グループホームねっとに参加しており、勉強会や交流会に参加している。そこでの情報などを皆に伝えて、サービスの質の向上に取り組んでいる。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に面談で本人とお会いしている。その様子やアセスメント情報、関係事業所からの情報等を皆で把握し、本人の気持ちに寄り添えるよう支援している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の面談で、不安なことや要望等をお聴きしている。又、見学時や荷物搬入時などでも、挨拶をしたりコミュニケーションを図りながら関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申し込みや面談の際に、どのようなサービスを希望され、必要としているのかと一緒に考えている。関係事業者とも情報を交換しながら、ニーズに沿ったサービス利用ができるよう対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日頃から、支え合う関係を意識している。一人ひとりの心身の力を大切に、それらが発揮できる場面を暮らしの中でつくっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と共に本人の暮らしを支えていきたい旨を伝えている。 毎月の生活の様子を手紙に書き、報告している。面会・行事への参加・誕生会への参加等を通して“つながり”を実感できるよう心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	家族や知人とのハガキのやり取り、馴染みの美容室・床屋・歯医者に出かけたり、自宅や家族の家で過ごすなじみの関係の“つながり”を継続できるよう、家族と協力しながら支援している。	お盆には家族の協力を得ながら8名の方が自宅への外出や外泊、お墓参りをしている。意思表示が困難なある利用者について日々の行動から自宅への思いを察し、家族のいる自宅に送り、2時間後に迎えに行くという表情になっていたという。本人の思いは自宅なのか家族なのか両方なのかは不明だが帰れたことで胸のつかえがとれ、その後は落ち着いて暮せている。利用後も利用者が本人らしく生き生きと暮らすためには馴染みの人達との交流や場所とのつながりが非常に大切だと認識し、職員は小さな変化も見落とさないように拾い上げ、支援に繋げる努力をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を良く観察し、互いに心地よく関わり合えるよう座席を工夫したり、共同で作業を行うなどの支援をしている。 又、隣の方のみかんの皮をむいて下さったり、散歩の時に車いすを押して下さるなど自然に支え合う関係を大切にしている。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	亡くなられて退居された方の自宅へホームでついたお餅を届けて、故人と一緒に忍んだり、家族をクリスマス会に招待してミニコンサートを披露して下さるなど、これまでの関係を大切にしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	居室担当ごとにセンター方式のアセスメントを活用し、一人ひとりの思いや意向等の把握に努めている。又、日々の暮らしの中で関わりながら望む暮らしを検討している。	意思表示の難しい利用者が帽子をかぶり外に出て何時も同じ方向を眺めたり、歩いていく様子から職員は地図を広げ調べるとその方向には本人の自宅があることがわかった。自宅には元気とは云えない家族がおり、相談の上、ホームの車で一時帰宅をすることが出来た。何気ない帽子等の動作から本人の思いへと繋げられたことは全職員が本人の思いや意向に関心を持ち本人の視点で話し合った職員の取り組みの成果である。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談時や共に暮らしながら、生活歴や生活環境・馴染みの暮らし方・今までのサービス利用状況などを本人・家族・関係事業所から情報を収集している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の様子を良く観察しながら、毎日の申し送り等で心身状態を把握している。又、意思や自己決定が尊重された一日を過ごせるよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	それぞれの意見・アセスメントを反映して介護計画を作成している。居室担当がアセスメントを作成し、カンファレンスではスタッフ全員が意見を出している。状態に変化が見られる場合は変更している。	家族は介護計画について分かり易く説明を受けており、内容についても一緒に話し合うことなどから、介護計画に関してはほぼ全家族が高い関心を抱いている。介護計画を読むとその方の姿が見えてくるように一人ひとりの計画が作成されており、定期的に評価、見直しも行っている。職員は介護計画に関する話し合いに参加し、個別の目標や援助内容を十分理解している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のカルテに日々の生活の様子やケアの実践した内容などを記入している。スタッフは必要な情報を毎日の申し送りで共有しながら実践し、介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問マッサージや居宅療養管理指導(訪問歯科)を利用している方がいる。又、その時々ニーズに合わせて、個別での外出や家に帰る支援・受診など柔軟な対応を心がけている。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方がホームに訪ねてきて下さっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は本人・家族の希望で決めている。スタッフは日頃から主治医に情報を提供し、連携に努めている。体調不良や薬の変更時には必ず家族等に報告している。	利用者の多くはかかりつけ医を変更していないが、遠方などの理由から利用開始時に本人や家族の希望で変更する場合もある。毎週医師が来訪し利用者の健康相談に応じ、異常などがあれば主治医に連絡をしている。24時間365日法人の院長との連絡・相談も可能であり、利用者の状態が急変した場合には協力医療機関と連携し適切な医療が受けられる仕組みになっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員として看護師が勤務している。スタッフは、日々共に暮らしながら気づきや症状などを報告し、協力して適切な受診や処置などが受けられるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には、サマリを提供している。病院のケースワーカーや看護師から状態や経過を確認したり、お見舞いに行き情報の交換を行っている。同一法人の医院や協力病院とは日頃から連携を図るようしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に重度化や看取りに関するホームの指針を説明している。状態を見ながら、早い段階から話をしたり、必要に応じて面談をしている。医師とも連携を図りながら、看取りの支援を行っている。	重度化した場合や終末期に本人・家族の意向について早い段階から話し合う機会を設けている。本人や家族の意向、本人の尊厳などに関してどのように対応できるか、一人の人の最期をどのように迎えるのが本人・家族の思いなのか職員は支援方法を検討している。意向が変わればその都度話し合い、本人家族が安心できる最期を迎えられるよう取り組んでいる。最期を迎えた家族からは「家族のように温かく、家族より家族のように接していただけた」と感謝の言葉が送られている。看取り支援が縁で家族との親交が深まり、その後も交流が続いている例もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフミーティングなどで応急手当や初期対応について学んだり、訓練をしている。最近では、スタッフが知りたい緊急時の対応について皆で学ぶ機会を設けた。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の隣接する老健と合同の消防訓練はもちろん、昨年からは毎月避難訓練を自主的に行っている。様々なことを想定して、より実践的な訓練を意識して行っている。	年2回消防署の指導の下、併設施設と合同で昼夜想定での防災訓練を行っている。利用者も避難訓練に参加している。毎月、昼夜に関係なく突然(全ての災害を想定し)に始まる実践さながらの避難誘導訓練を利用者と共に行い、いざと言う時に確実に避難誘導が出来るように繰り返し訓練をしている。防災設備は開設時よりスプリンクラー、自動火災報知器、火災通報装置、誘導灯、消火器などが整い入居者の安全に努めている。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	性格などを踏まえ、一人ひとりに合った言葉かけを心がけている。又、心身の力を見極めながら、誇りやプライバシーに配慮された暮らしができるよう心がけている。	利用者一人ひとりのありのままの姿を受け入れ、本人らしく暮ら続けられるよう個別ケアを実践している。排泄や入浴には特にプライバシーに配慮しながら支援している。利用者は苗字や名前に「さん」をつけて声をかけている。現役の時の役職名で呼ばれている方はその立場にふさわしい振る舞いを見せていた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々、一緒に過ごしなが、思いや希望を表すことができる言葉かけや支援を心がけている。食べ物や飲み物・おしゃれ・過ごし方など一人ひとりの有する力に合った自己決定ができるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースで暮らせるよう支援している。起床・就寝時間や過ごし方など、希望・意向を尊重して個別ケアを実践している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	アセスメント情報などからヘアネットをかぶる・薄着にベスト・髪を染めるなどの“らしさ”が発揮できるように支援したり、その時の気分で洋服を選んでお洒落を楽しむことができるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの力量や意欲を大切に食事作りや片づけを行っている。 食事は状態に合わせてミキサー食やキザミ食を提供している。又、ふき味噌やねまがり竹の味噌汁を作って皆で食べるなど、旬の食べ物やなじみの食べ物を楽しんでいる。	訪問調査当日の昼食はおやきと言うことで2ユニットの利用者が一同に集まり、ナスを刻み、粉をこね、ナスの味付け、おやきの皮作りなどに挑戦していた。職員が利用者に尋ねたり、利用者が聞いたり賑やかに楽しく作業していた。おやき作りは得意と伺っていたが包丁使いも皮作りも昔取ったきねづか、腕前は今も衰えていなかった。お昼は沢山のおやきを囲み、「おいしいよ」、「沢山食べて」、「私はもう2つ食べたよ」と利用者も職員も互いに勧め合っていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	隣接する老健の管理栄養士がたてたメニューで栄養バランスの良い食事になっている。食事・水分量は個別に把握し、状態や好みを考慮しながら支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりの力量に合わせた口腔ケアの支援をしている。個別にスポンジガーゼやクルリーナなどの口腔ケア用品を使用している。又、協力歯科医や歯科衛生士に関わってもらい、義歯の調整・口腔ケアや口腔体操などを行っている方もいる。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンや力量を把握して、トイレ介助の時間やおむつ類の使用など個別に支援している。	一人ひとりの排泄状態を職員は共有している。時間や態度などからさり気なくトイレ誘導をしている。リハビリパンツ、布パンツ、オムツなど本人の排泄状況にあわせた介護用品が検討され使用している。夜間のみポータブルトイレを使っている方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	状態に合った形態の食事提供や適量な水分摂取を促している。おむつ使用の方でも、トイレやポータブルトイレに座り排便を促したり、腹部のマッサージを行うなど個別に対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には、週2回入浴日を決めているが、個別のニーズに合わせて、別の日や時間帯の入浴も可能。重度の方でも、スタッフが支えながら湯船に浸かることができている。	入浴日は決めてあるが利用者の意思を大切にしている。希望があれば毎日でも入浴は可能である。ミカン皮湯や菖蒲湯、時にはお土産の温泉入浴剤などで変わり湯を楽しんでいる。洗い場が広く移動もしやすく、介助もし易い。大きな浴槽のある浴室、一人用浴槽が2つある浴室と2タイプあり、利用者は好きなほうに入ることが出来る。入浴を嫌がる利用者はおらず利用者全員が毎回楽しみにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の睡眠や日中の眠気をよく観察しながら、夜間はよく眠れるように・日中は適度に休息できるよう声をかけたり促している。定期的にシーツ交換や布団を干して気持ちよく眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬については、個別カルテと専用ファイルで把握できるようになっている。服薬は一人ひとりの力量に合わせて支援している。症状の変化も留意して観察している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事や畑仕事、花摘み、読書、散歩、写真撮影、ケンタ(飼い犬)とのふれ合いなど生活歴や現在の状況などに合わせて役割や楽しみ・気分転換の支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自由に外に出て、花を摘んだり草を取ったり、ケンタ(飼い犬)を可愛がるなどして過ごしている。又、ホームの車で家に帰り、妻と過ごしてホームに戻ることや買い物に出かけたり、一緒に外を歩くなど出来る限り希望に合わせて対応している。食べたい物を家族と一緒に食べに行くなど、家族とも協力しながら支援している。ホーム全体では外出行事を計画して出かけている。	春や秋には併設施設のリフト車を借りて近隣の名所や公園へ、花見や紅葉狩りに出かけている。ホーム内では補助具などを使いながら自力歩行の利用者も外出時には車椅子を使用し、日常的な散歩(施設の敷地内やリング畑に囲まれた道路)や行事外出に皆と一緒に出かけ楽しんでいる。一人ひとりの希望に沿って個別外出支援を積極的に行っており、外気に接する機会はかなり多い。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりの希望や力量に応じてお金を所持し、買い物や外食を楽しんでいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	一人ひとりの力量に応じて、家族や知人と電話をしたり、ハガキ・手紙のやり取りを行っている。行事の時などに撮った家族写真と一緒に手紙を書いて送る支援も増えてきている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有のスペースは中庭からの採光で明るく、広々としており、季節の花・飾り物・お知らせボードなどがあり、季節感のある空間となっている。洗濯物が干してあったり、食事を作る音やおいなど生活感も感じられる。冷暖房も完備しており、室温調整を行っている。	廊下の壁には外出や行事のスナップ写真が月ごとに分けて掲示されている。どの写真も笑顔が溢れている。玄関には「星のさと」の名前の由来が押し絵として飾られている。ホームの愛犬、ゴールデンレトリバーのケンタが避暑がてら食堂で利用者と一緒に過ごしている。廊下やトイレ、浴室、食堂は広く車椅子でもスムーズに行き来できる。中庭からの採光の御蔭で居室に囲まれた建物の中央にある共有スペース全体が明るくなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室や中庭を眺めながら過ごせるスペース、ソファなど一人や個別で思い思いに過ごせる居場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのものや愛用品・家族の写真など本人や家族と相談しながら持ってきてもらい、居心地良く過ごせるよう工夫している。(ダンス・こたつ・テレビ・ソファ・アルバム・ハーモニカなど)	居室の入口には縞の着物をアレンジした涼しげな暖簾、ネコの絵の暖簾など思い思いの暖簾が下がっている。利用前からのスタイルを通し畳を敷いている居室、テレビや座り心地がよさそうなソファのある居室、家族写真が沢山ある居室、ベッドに大きな熊のぬいぐるみを寝かせ夜は自分が小さくなって熊と一緒に寝ている居室など本人が居心地良く過ごせるよう工夫されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内はバリアフリーになっている。一人ひとりの力量や状態に応じて、居室の配置やL字ベッド柵、センサーマットなどの使用により、安全かつ自立を大切に暮らせるよう支援している。		